

'Der Bauern=Spiegel' von Jeremias Gotthelf mit besondererBerucksichtigung der Traditionen von der Aufklarung und den Spiegelmetapherals  
Buchtitel II

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/985">http://hdl.handle.net/2297/985</a>

# イエレミアス・ゴットヘルフの『農民の鏡』 (Der Bauern=Spiegel)

—「啓蒙」と「鏡」を中心に II—

志 村 恵

序

- 1 世界を照らす啓蒙の鏡？
  - 2 啓蒙批判＝民衆啓蒙(Volksaufklärung)？（以上前回：第15号）
  - 3 読者
  - 4 鏡ものとしての『農民の鏡』
- まとめ（以上今回）

### 3 読者

ミアスが生まれた祖父母の家にはどんな本があったのであろうか。「二人は印刷された字は読むことが出来た。特に祖父はよく大きな声で『宝石箱』や『真実なキリスト教』から抜粋して朗読した。しかし、二人とも筆記体を読むことは出来なかったし、計算も出来なかった」(I, 7f.)。ここに言う『宝石箱』とは、1825年にライプチヒで出版されたゴスナー(Johannes Evangelista Goßner 1773-1858)の教化本“Schatzkästlein, enthaltsame biblische Betrachtungen mit erbaulichen Liedern auf alle Tage im Jahre. 2 Bde.”<sup>1)</sup>、また『真実なキリスト教』とは、広い範囲で流布していたアルント(Johann Arndt 1555-1621)の“Vier (sechs) Bücher vom wahren Christenthum”(1606 f.)であり、両者ともに聖書と賛美歌を除けば、農民の所有した数少ない書物の一つであった。これらから教訓や説教として家長が朗読をするような読書形態は、当時の農民の読書のあり方を示して興味深い、果たして『農民の鏡』がこれらのものと並んで、農民たちの蔵書となりえたのであろうか。

ゴットヘルフの作品を実際に読んだ読書層については、一般的に言っても極めて難しい問題である<sup>2)</sup>。すなわち、実際の受容を確認できるような同時代の批評もあまり存在せず<sup>3)</sup>、また、読者から寄せられた反響も少ない。まして

や、受容状況を端的に把握できる読書日記や、本の実際の所有を示す財産目録などの実証的資料なども期待できはしない。民衆図書館の貸し出し記録も、19世紀前半のこの地域のものはない。こうした困難さを前提とした上で、本章では『農民の鏡』を中心にして、ゴットヘルフがどのような読者を想定していたのか、あるいは実際にはどう読まれたのかを議論したい。

ゴットヘルフは少ないながら読者から読后感想の手紙をもらっているが、それらは友人を中心とした牧師、教育関係者、医師、役人、良家の子女など限定された階層からのものである<sup>4)</sup>。しかも、これらの手紙は「民衆作家」としての名声が広まってからのものが多く、当時ズミスヴァルトで教師をしていたプピコーファー (Johann Adam Pupikofer 1797-1882) を除いて、『農民の鏡』の出版直後に寄せられたものは現存しておらず、ゴットヘルフの作家としての出発点での読者像を暗示するものはない。プピコーファーは、『農民の鏡』を「一息で読んでしまい」、更に「この本を回りに貸し出すために三冊購入した」(E 4, 230) と書いている。また、彼は『農民の鏡』の弱点、つまり「民衆の本としては時折過度の道理が混入」していることを見逃してはいないが、同時に、ゴットヘルフの書き方に好意を寄せている。すなわち、「彼はこれを芸術作品としてではなく、教訓として書いたのですから」(E 4, 230) と。この手紙は、本を回りに貸し出すという本の所有者にとどまらない当時の受容形態を物語っていて面白いが、ここで重要なのは、「社会奉仕団」(Diakonie) の仕事もなしたプピコーファーが、『農民の鏡』を、実際の受容は別として、「民衆のための教訓もの」と捉えていたことである。もちろん、こうした一般的とも言える理解は「民衆啓蒙」(Volksaufklärung) との関係を考える上でも重要である。

ブルクドルフで出版されていた『ベルン民衆の友』(Berner Volksfreund) の編集長を1835年から1840年まで務めたライトハルト (Johann Jakob Reithard 1805-1857) は、ゴットヘルフの1854年の死に際して追悼文を寄せている。彼は、『農民の鏡』執筆当時ゴットヘルフと密接な関係にあった。ゴットヘルフもブルクドルフの「教師研修センター」でスイス史の教鞭を執るときには彼をよく訪問したようでもあるし、また、彼の編集する『ベルン民衆の友』に時事的な論評を数多く発表している。もっとも、ゴットヘルフの筆は辛辣をきわめ、ライトハルトはこれを「全く載せないか、載せるとしても一部を、表現を穏当にして掲載した」<sup>5)</sup>。さてそのライトハルトによると、ゴットヘルフは「こうした多くの、大体は徒労に終わった作家的な衝動をなんとか世に出そうという努力の後」、「計画もなしにベルンの民衆の生活からのス

ケッチと省察とを独自の手法で数枚の紙片に書き付けた。偶然、業界に通じた友人が訪問の際にこの紙片を見つけ、その深い心理的洞察と表現の独自性に驚き、最後まで書くように著者を励ました。そして、その夜のうちに、親密な雰囲気のある暖炉の傍らで、『農民の鏡』の構想はできあがったのである。三カ月後、原稿は完成した<sup>6)</sup>。勿論ここに言う「業界に通じた友人」というのはライトハルト自身のことであるが、何の計画性もなく書いた草稿を偶然に見つけ、その激励のもと一晩で『農民の鏡』の構想を練ってしまったといった「物語」は、この文章が追悼文の一部であることから、十分に割り引いて考えなくてはならない。しかし、ゴットヘルフが内容や形式に制限の多いジャーナリズムの世界で、自分の政治的見解を公表することに限界を感じていたことや、啓蒙主義的色彩をも持つ『ベルン民衆の友』の編集長が『農民の鏡』の成立現場の近くにいたという事実は無視できない。しかし、この点だけで、たとえば『ベルン民衆の友』の読者であった様な市民層のリベラル派や啓蒙主義者たちに『農民の鏡』の読者を閉じこめてしまうわけにはいかない。

それでは作品の中で言及されている読者はどうであろうか。初版の序文には「愛する農民のみなさん。この贈り物を心を込めてプレゼントしたいと思います。たとえ誤解され、誹謗され、侮られ、あざけられても、私はみなさんに誠実でありたいと思います。もし、繊細な心の持ち主がこの本を手にするのでしたら、その無骨さにぞっとしてしまうかもしれません。でもちょっと待って下さい。いつか大急ぎでそういった方のためには繊細さでもってまいりますから。でもこの本はあなた方のために書いたのではありません。ですからどうぞうっちゃって下さい」(I, 378)と、あくまでも農民のために書き、市民層のための本でないことをわざわざ断っている。しかし、この言明には農民を読者として想定していることだけではなく、むしろ当時の中心的読者層であった市民階級、特に女性の読者を意識していることが読みとれる。小説の中でも、「暇なときに本を読む高貴なご主人ご婦人方」(I, 177)などと都市民を意識した箇所が散見されるのである。これらは確かに単なる語りのテクニクと考えることも可能ではあるが、やはり市民階層の読者を念頭に置いていたと考える方が解りやすい。この序文ではさらに、『農民の鏡』に対する教育関係者からの批判を先取りする形で、教師たちが「肩をすくめ」、あるいは「同情したり、残念がったりしてくれる」(I, 379)と教師の目を意識している。これは、前半における生徒ミアスの目から見た学校批判(8章、12章、14章)、あるいは後半における教職志願者ミアスを介しての教育制度批判

(32章)、さらには政治論議を挟みつつミアスの生活の影の部分を描いた小説の手法に対する否定的反応への先制的防御と思われる。

さて、民衆はゴットヘルフの小説を實際手にしたのであろうか。よく引用されるが、ケラー (Gottfried Keller 1819-1890) はゴットヘルフの作品が一冊4グルデンもすることから、民衆が購読するはずがないと決めつけていた<sup>7)</sup>。人口増大と産業発達のアンバランスから生じた「大量貧困」(Paupelismus)により、18世紀と比べ19世紀にあっては、逆に民衆の懐具合は悪くなり、本の所有数は減少している<sup>8)</sup>。『農民の鏡』は、民衆教育協会などが配布した啓蒙パンフとは違い、れっきとした小説であり、その値段も安くはなかった。しかも、小説というジャンルはまだ農民一般になじみのあるものではなかった。ゴットヘルフ自身語り手に対し、長くなりすぎないようにと繰り返して注意している割には (I, 225 など)、自ら認めているように、「後半の政治的部分」(I, 383)をはじめ、脱線したり、論議が長くなりすぎたりして、分量が膨大になり、民衆はこれでは読む気がしないだろうと批判されもした<sup>9)</sup>。

第二版への序文の中で、ゴットヘルフは、この本が「農民の鏡」というより「すべての人の鏡」(I, 380)あるいは「ご主人方の鏡」(I, 386)とした方がよいと指摘されたことを告白している。これに対して彼は、「本質的に農民生活こそがこの本の基盤と土台をなしている」(同)と反論する。しかし、彼の作品が農民の生活を舞台にただけとの批判は当時からあり、1843年9月28日付けのゲルスドルフ (Irenäus Gersdorf) あての手紙で、ゴットヘルフは「友人の一人が、私の本が民衆本かどうか疑わしいと言う。教育ある読者のための単なる民衆もので、民衆には良くないものだ」(E 5, 332) そう批判されたと明かしている。これはおそらく、フューター (Eduard Fueter, 1801-1855) の「君は主に農村住民のうちの教育を受けた者達、都市民、読書の好きな女性に読まれているのだ」(E 5, 268)などに代表される様な理解を指していると思われるが、これに対して、ゴットヘルフは民衆に受け入れられていることを強調してやまない。すなわち、「この決意のもとに民衆は、私の作品を媒介なしに直接読むだけではなく、どんどん買うことで支援してくれたのです」(E 5, 332 f.)と。しかし、この強調の意味するところは何なのであろうか。確かに、『農民の鏡』においても、たとえばヒルツェル (Johann Caspar Hirzel 1742-1798) の“Die Wirtschaft eines philosophischen Bauers”(1774)などの民衆啓蒙書が常套としていた様に<sup>10)</sup>、自分がいかに民衆を愛しているか、あるいは民衆のもとに生まれたゆえいかに民衆をよく

知っているかが力説されてはいる(I, 378 f.)。また、農民出身の主人公の人生を物語る筋立ても、民衆啓蒙書によくあるものではあった。しかし、『農民の鏡』の示す民衆啓蒙書への親密性にも拘わらず、ミアスは最終的には農民共同体の中へその構成員としては入らない<sup>11)</sup>。居酒屋談義をして民衆教育をすると言うミアスの人生の到達点は、ある意味では現実感がないし、また、共同体から一定の距離を置く善意の知識人の域からは出ていない。ゴットヘルフ自身、宗教改革期以来ベルンの市民階級に属し、多くの聖職者を輩出した家系の出であったので<sup>12)</sup>、いくら民衆を理解し、民衆の中で生きたことを強調したとしても、その民衆教育観にはおのづと限界があったのである。これに加えてゴットヘルフが使用している「民衆」という言葉の曖昧さの問題も出てくる。シェンダは“der gemeine Leser”が意味している「下層」とは、元来市民階級内部での話であると鋭い指摘をなしているが<sup>13)</sup>、たとえばホルは、ゲルスドルフが「民衆」と言うときそこには「臣下」の意味もあるが、ゴットヘルフの場合は「市民」の意を含んでいるとするし<sup>14)</sup>、それに、ゴットヘルフは後年特に民衆を理想化して考えていたふしもある<sup>15)</sup>。いずれにせよここで問題なのは、「民衆の中へ入っていきたい」(E 4, 281)という意志、政治的な関与の意志であって、史料の制約もあって、われわれには現在の視点から見る社会的に厳密に規定された読者階層としての「民衆」の姿は見えてこない。

ところで、忘れてならない視点がもう一つある。それは、ゴットヘルフに批判的な勢力との関係である。『農民の鏡』の第二版への序文は、言わば「弁明書」(Apologetik)の様相を呈しているし、民衆をどの勢力が獲得するかの政治的緊張関係の中でこそ、読者としての民衆についての発言は捉えるべきであり、従って、農村にその政治基盤を置いたラディカル派のゴットヘルフ批判もそのコンテクストにおいて相対化されなくてはならない。

結局、実際の受容形態については依然よく判らない部分が多いのであるが、『農民の鏡』においては、「同時代の批評家もそして出版者も、さらにはゴットヘルフ自身でさえ、その読者が現実にはどの階層に属しているのか、明白な認識を有していなかった」<sup>16)</sup>とまで言わないにせよ、その目標とする読者は確かに曖昧で、しかも揺らいでいる。それは『農民の鏡』が処女小説であるがゆえの技術的未熟さによるのではなく、それが、政治的な緊張関係の力学の中にあっただからであり、また、それが私的あるいは公的な批判や批評によって次第に具体的な読者像が意識・形成されていったであろう時期よりも前に書かれたからである。それは、1840年以降、特に「三月革命」以後ベルリン

の出版者シュプリングー (Julius Springer 1817-1877) の仲介によってドイツの読者を獲得した時期や<sup>17)</sup>、1840年から1845年にかけて『新ベルン・カレンダー』 (“Neuer Berner Kalender”)によって直接民衆に向かった時期、つまりカレンダーと文学作品とで言わば読者を分けようとした時期以前だからなおさらである。内容的には、このゆらぎはミアスの自己発達を描く前半と後半の民衆教育者ミアスの活動、つまり、農民の農村共同体の中での物語と農村共同体の枠外に立つ教育者という視点の分裂にもよるのであるが。

ゴットヘルフは『農民の鏡』を都市読者、民衆教育者たちに読まれるであろうというある程度の子想のもと、曖昧で、しかも希望的観測の色彩の濃い民衆受容の期待をも込めて書いたと言えよう。ブルクハルター (Joseph Burkharter 1787-1866) の様な経済的にも政治的にも指導的立場に立つ農民の中には、ゴットヘルフの作品を自分自身でも読み、また後に『ウーリ物語』 (“Uli der Knecht” 1841)で描かれた様に、使用人たちに読んで聞かせる者もあったようだ。それに「民衆教育協会」や教区の図書館を介した受容も可能であったので<sup>18)</sup>、漠然と「民衆」という言葉を使用することは許されないであろうが、だからと言って一概に都市民と民衆教育関係者のみを対象とした「民衆啓蒙書批判」<sup>19)</sup>に読者を限定して考えるのは少々行き過ぎだと思われる。

#### 4 鏡ものとしての『農民の鏡』

『農民の鏡』。この題名は、この小説の果たすべき役割の一面をすでに十分に物語っている。しかしゴットヘルフはそれだけでは飽きたらず、さらに序文の中でも語りかける。すなわち、「皆さんこんにちは。どうか気を悪くしないでください。皆さんに贈り物をしますので、どうかそのまま誠実に受け取ってください。それは一つの鏡です。でも、それはそこに映っているのが自分の顔なので、だれもが美しい顔が映っているなあと思うような質の悪い鏡ではありません。私の鏡は、皆さんに人生の太陽の面ではなく、影の面を映し出します。つまり、普段あまり見ないもの、あまり見たくないものを映すのです。しかし、鏡がこれを映すのは、嘲るためではありません。真理のためなのです」(I, 378)と。「太陽の面」だけでなく「影の面」をもとというのは、一時代前の「農民冊子」(Bauern-Büchlein)などにおいてもよく標榜されたことであり<sup>20)</sup>、そこで描写される「影の面」も、その目的は同じく読者を教訓へと導くためのものであった。1840年10月27日のブルクハルターあての有

名な手紙に、「カレンダーは、人生の書であるべきです。生の鏡です。でもこれは内的な生および外的な生の鏡ということです」(E5, 89)とあるが、これは、前述のように農民を直接的な読者と設定したカレンダーの役割を示したものである。では、目標の読者が揺らいでいる『農民の鏡』ではどうであろうか。ミアスが当局批判の嫌疑で身柄を拘禁されているうちに、脱走し、フランス軍の傭兵となる過程を描いた26章において、語り手は自分の人生をこのような小説の形式で物語る目的について述べている。「私が書くのは、人々に読んでもらうためです。というのは、これが多くの人々のための鏡であるべきだからです。私の意図するのは、私どものところ、つまり祖国で私に起こったことを書き留めることなのです。読んだ人が何かしら学ぶことが出来るように」(I, 225)と。まとめるならば、真理のために、そして教訓として影の部分をも恐れず映し出す鏡ということにでもなるのだろうか。

小説と「鏡」の関係については、現代の読者ならすぐにスタンダール(Stendhal 1783-1842)の鏡を思い描くであろう。1830年に発表された小説『赤と黒』(“Le rouge et le noir”)の第二部第19章において、語り手は小説を鏡になぞらえてこう述べる。「さて、諸君、小説というものは大道に沿うてもち歩かれる鏡のようなものだ。諸君の目に青空を反映することもあれば、また水溜りの泥濘を反映することもあろう。すると諸君は、鏡を背負籠に入れてもって歩く男を破廉恥だといって非難する！鏡は泥濘を映し出す、そこで諸君はその鏡を非難しようというんだ！それより水たまりをこさえておくような大道をとがめたまえ。いやそれより、水がたまって水溜りができるままにしまっておく道路監督を非難したまえ」<sup>21)</sup>と。スタンダールはここで「鏡」のメタフォリックを使用することで大きな誤解の危険を冒している<sup>22)</sup>。それは「鏡」がヨーロッパ文化史においてギリシャ・ローマ古典以来の多様なイメージを有しているからである。また、喚起するイメージの多様さによる誤解の危険性と同時に、さらに、「鏡」の写実主義的機能にも誤解の危険性はあったし、また実際誤解されてきたのである。スタンダールの鏡は、「自然をありのまま提示する鏡」、「生をありのままに描写する鏡」といった後代のリアリストたちの作った頑強な枠にはめられた鏡ではない。スタンダールのテクストから読みとれるのはただ、芸術的原則としての経験世界に賛成すること、鏡は経験世界の全体を写し取るのではなく、あくまでも選択的な鏡であるということ、そして、その描写の客観性が鏡を持ち運ぶ人物の人格には拠らないということである<sup>23)</sup>。さらにここで重要なのは、文学に経験的世界を組み込んでいく際に、それがモラル的手本の意味においてはなされなかったと



いうことである<sup>24)</sup>。ここがゴットヘルフの場合とは決定的に異なる点である。確かに、ゴットヘルフの立てた鏡は、醜い姿を突きつけられる側の心情を著しく損なうほど、あまりに正しく恥部をさらけ出すものではあった。しかし、それはあくまで教化の手段としてであり、圧倒的にモラルの次元で語られている。そして、それと同時にもっと直接的に「鏡」の伝統的なイメージリー、特に本の題名としてのそれにつながっている。

「鏡」(=*speculum*, *Spiegel*, *miroir*, *looking glass* など)をその題名に冠する書物は<sup>25)</sup>、アウグスティヌスの“*speculum augustini*”(vor 430)まで遡るが、本格的になったのが13世紀。そして、ヴェネチアにおいて鏡が大量に生産できるようになった16世紀、特に1580年頃には最盛期を迎える。最初は、1100年頃の南ドイツの説教集である“*speculum ecclesia*”のような宗教的な内容のものがほとんどであったが、1300年以降は、世俗的書物の題名として「鏡」がより顕著になってゆく。そして、1635年には、ホノリウス(Honorius Augustodunensi ca.1080-ca.1156)の“*speculum mundi*”の跡を継ぐスワン(John Swan)の“*speculum mundi*”が現れる。これは、百科全書的な世界知識の集大成とも言うべきものであった。Grabesは、こうした鏡ものを、1)存在するものを映す、2)あるべきもの、あるいは、あるべからざるものを映す、3)これから起こるだろうことを映す、4)空想にのみ存在するものを映す、の四つに分類しているが<sup>26)</sup>、本論では紙面の関係もあり、ゴットヘルフの『農民の鏡』に近い性質のものを列挙するにとどめたい。

ゴットヘルフは、『学校教師の喜びと悲しみ』(“*Leiden und Freuden eines Schulmeisters. Erzählt von Peter Käser*” 2 Bde. Bern 1838/39.)について、これが教師の「とりわけ教師研修生のための鏡」(E 5, 23)であると述べている様に、特定の専門職の理想像を示したり、その職業に固有のノウハウを伝授するいわば職業ハンドブックとでも呼ぶべき「鏡もの」の伝統の中にある。前章で紹介した『農民の鏡』に対しての批判、すなわち「*aller Leute Spiegel*と呼ぶべき」(I, 380)や「*Herrenspiegel*をまず書くべきだった」(I, 386)などは、「鏡」の語法のこの伝統に則ったものである。ちなみに、こうした職業ハンドブック的な「鏡もの」の代表例としては、中世以来ヨーロッパの各諸侯がその帝王学のために利用した『君主の鏡』(*Fürstenspiegel*)や<sup>27)</sup>、その他、医者、商人、職人など多様な職業のための「鏡もの」を挙げる事が出来る<sup>28)</sup>。また、同様の系列である「家長もの」(*Hausväterliteratur*)の伝統をも忘れてはならない。すなわち、ハールの指摘するようにゴットヘ

ルフにとっては、「キリスト教的エコノミーとは、農業的家政の商業的、労働法的、農業技術的、心理学的問題を含んだ聖書的家政学」<sup>29)</sup>だったのだ。実際、『農民の鏡』には家政本的な要素もある<sup>30)</sup>。そこでは技術的な知識、つまり農業についての具体的な言及がなされているのである。「1 ロートの宗教、1 ロート半の道徳、2 ロートの上品な生き方、そして半ポンドの役に立ついろいろ」(E 5, 331)を薬のように調合して民衆に服させると、それまでの民衆作家達を批判している割には、百科全書的農業技術・家政の知識が織り込まれており、逆にある面ではこうした要素が「おとり (Lockvogel)」(I, 380)だったのかもしれない。

ところで、『ベルン民衆の友』の1838年4月11日号に、匿名で、“Das Volk der Vaterstadt: oder eine kleine Scheibe aus dem Narrenspiegel”という論評が、ヘクサメータ形式で載った。奇しくも、アレマン地方は中世期以来この「愚者の鏡」が盛んに書かれて来た地域であった。「愚者の鏡」とは、愚者の仮装のもと権力者批判や社会批判をするものであるが<sup>31)</sup>、当時のベルンにおいて『農民の鏡』をこの系譜のものとして捉え、これを社会批判ものとして読もうとする理解があったことは注目に値する。『農民の鏡』の前半において、主人公ミアスは純朴で無教養な人物として登場し、その世渡りの下手な愚かとも言える成長過程を通じて特に村の有力者たちの自欲と教育体制の不備が批判される。ところが、後半、ミアスはボンジュールの教育の成果もあって立派な兵士として成長を遂げ、十分な経験を積んだ世なれた大人になったはずであったが、故郷に戻って職探しを始めると、再び世間知らずの人のいい素朴な人間に戻ってしまう。ミアスに民衆教育者になることを勧める測量技師の前では、まるで愚かな子どものようである(32章)。しかし、このミアスの愚鈍な求職活動によって再び村共同体の腐敗した政治体制への批判がなされるのである。

19世紀に入ると、鏡のモチーフは承知のように内面的傾向からむしろ外的になって、写実性とより強く結びつくようになったが、当然ながら、内省のための鏡の作用が廃れたわけではない。そう言った意味で、前述のプピコーファーが『農民の鏡』は「読者の省察 (Reflexion des Lesers) を呼び覚まします」(E 4, 230)と感想を述べているのは極めて正当であろう。ゴットヘルフにとって、教訓を与え反省を促すことが、この小説の主目的の一つであったのだから。そして、その省察を動機づけるのが、隠された不正や欠陥を暴く「真実の鏡」(speculum veritum)であり、時折ゆがんだいびつな像をも結ぶ、読者に醜い姿を突きつける「おどし鏡」(Abschreckender Spiegel)なの

である。しかし、それはあくまでも「むなしい怒りのためではなく、改善のため」(I, 380)なのであって、その意味で、『農民の鏡』は自らの罪を認め(Sündenspiegel)、神へと立ち返るための「告解の鏡」(Beichtspiegel)でもあった。

最後に、前章で扱った読者の問題をも絡めてまとめてみよう。『農民の鏡』を文字どおり「農民」のための「鏡」とするならば、それは農民を訓練し、教育する手引きであり(Bauernspiegel)、また、ミアスの居酒屋教育者(居酒屋で人々に酒を飲みながら様々な忠告を与え、日中はその居酒屋の子どもたちを教育し、自分の人生を書物に書いてより広範な人々の教訓とする三重の教育者)としての姿を通じて、民衆教育のあり方を説くものとすれば、それは批判的民衆啓蒙指導書(Aufklärerspiegel)であり、さらに、社会批判的側面をより強く見るならば、そこに現れてくるのは、「愚者の鏡」や「真実の鏡」、あるいはまた「写実的な鏡」である。いずれにせよ、『農民の鏡』は「鏡もの」の多様な顔を見せてくれる。

## まとめ

われわれは「啓蒙」と「鏡」、そしてその両者をつなぐ視点でもある「読者」を中心にして、『農民の鏡』を考えてきた。そこに処女作としての欠陥を見るか<sup>32)</sup>、ゴットヘルフの持つ本質のすべてが隠されていると見るか<sup>33)</sup>は別として、やはり、想定されている読者のゆらぎと作品の不統一性は覆い隠しようがない。そして、この「ゆらぎ」や「不統一性」は、対立を結びつける能力のゆえというより<sup>34)</sup>、むしろ19世紀芸術、特に「三月前期」の特徴である対立要素が引き起こす緊張・平行関係によるものであろう。民衆に対する教育熱と時代に関わろうとする政治的意欲において啓蒙主義の遺産、特に後期の民衆啓蒙のそれを引きずりながら、ゴットヘルフは、近代的問題意識と農民を文学の対象とする平等主義・写実主義的な側面をも持ち合わせている。そして、その「鏡」のイメージラリーにおいては、写実的機能と伝統的な「鏡」の多様性を合わせ持つ。こういった意味で、ブラウンガルトが「啓蒙主義的リアリズムがゴットヘルフの作品のアスペクトのひとつ」<sup>35)</sup>とするのも単なる形容矛盾ではない。

『農民の鏡』は、信仰と理性、都市住民と農村住民、写実主義と伝統的イメージラリー及びレトリック、文芸と政治議論などの多くの二項対立が醸し出す緊張・平行関係の中で、時代状況や農村が抱える問題に鋭敏に反応する

農村牧師の現場の視点で書かれた、そしてゴットヘルフの文学の本質を内包する、魅力的ではあるが、多くの欠陥を持った未だ過渡的作品と言えるだろう。

## テキスト

テキストは全て Jeremias Gotthelf : Sämtliche Werke. 24 Hauptbände und 18 Ergänzungsbände. Erlenbach-Zürich 1911-1977.による。数字はそれぞれ巻数（ローマ数字はHauptband、E+アラビア数字はErgänzungsband）およびページ数を表す。

## 注

- 1) I, 442. 参照。あるいは、ヘーベル (Johann Peter Hebel 1760-1826) の“Schatzkästlein des rheinischen Hausfreundes”(1811) とも考えられるが、その宗性を考えると、ゴスナーのものの方が妥当である。
- 2) Winfried Bauer: Jeremias Gotthelf. Ein Vertreter der geistlichen Restauration der Biedermeierzeit. Stuttgart/Berlin/Köln/Mainz 1975, S. 139.など。
- 3) 同時代の『農民の鏡』に対する批評については、Bee Jucker/Gisela Martorelli: Jeremias Gotthelf 1797-1854 (Albert Bitzius). Bibliographie 1830-1975. Gotthelfs Werk-Literatur über Gotthelf. Katalog der Berner Burgerbibliothek. Bern 1983, S. 109. 参照。
- 4) Hanns Peter Holl: Gotthelf im Zeitgeflecht. Bauernleben, industrielle Revolution und Liberalismus in seinen Romanen. Tübingen 1985, S. 33.
- 5) Johann Jakob Reithard: Nachruf. In: Walter Muschg (Hg.): Jeremias Gotthelfs Persönlichkeit. Erinnerungen von Zeitgenossen. Basel 1944, S.188.
- 6) Ebds.: S. 189 f.
- 7) Gotfreid Keller: Sämtliche Werke. Ausgabe auf Grund des Nachlasses. Hg. von Carl Helbling. Bd. 22. Bern 1948, S. 44.
- 8) Rudolf Schenda: Volk ohne Buch. Studien zur Sozialgeschichte der populären Lesestoffe 1770-1910. Frankfurt 1970, S.461.
- 9) Eduard Strübin: Jeremias Gotthelf als “Volksschriftsteller”. In: Schweizerisches Archiv für Volkskunde 79 (1983), S. 49.
- 10) Heinz Otto Lichtenberg: Unterhaltsame Bauernaufklärung. Ein Kapitel Volksbildungsgeschichte. Tübingen 1970, S. 18 f.
- 11) Holl:a.a.O., S. 144. など。農村経済への無理解や結婚観からその「市民性」を指摘するものに：Udo Köster : Literatur und Gesellschaft in Deutschland 1830-1848. Die Dichtung am Ende der Kunstperiode. Stuttgart/Berlin/Köln/Mainz 1984, S. 113

f.

- 12) Werner Juker: Leben und Persönlichkeit Jeremias Gotthelfs. In: Walter Läd-rach (Hg.): Führer zu Gotthelf und Gotthelfsstätten. Bern 1954, S. 8.
- 13) Schenda: a.a.O., S.457.
- 14) Holl: a.a.O., s. 29.
- 15) Werner Günther: Jeremias Gotthelf. In: Benno von Wiese (Hg.): Deutsche Dichter im 19. Jahrhundert. Ihr Leben und Werk. Berlin 1969, S. 251 f.
- 16) Bauer: a.a.O., S. 139.
- 17) Hanns Peter Holl (Hg.): Julius Springer und Jeremias Gotthelf. Dokumente einer schwierigen Beziehung. Basel 1992. 参照。
- 18) Bauer: a.a.O., s. 140.
- 19) Wolfgang Braungart: Aufklärungskritische Volksaufklärung. Zu Jeremias Gotthelf. In: Fabula 28 (1987) S. 185 ff.; Klaus Jarkow: Bauer und Bürger. Die traditionelle Inszenierung einer bäuerlichen Moderne im literarischen Werk Jeremias Gotthelfs. Frankfurt am Main/Bern/New York/Paris 1989, S. 28 ff.
- 20) たとえば、1788年に出版されたツェレナー(Heinrich Gottlieb Zerrener 1750-1811)の“Volksbuch”など。Heinz Otto Lichtenberg: a.a.O., S. 68. 参照。
- 21) スタンダール:『赤と黒』下(桑原武雄、生島遼一訳)岩波文庫、1958年、213頁。
- 22) Viktor Šmegač: Der europäische Roman. Geschichte seiner Poetik. Stuttgart 1991 (2. Auflage), S. 149.
- 23) Ebds. S. 150 ff.
- 24) Ebds. S. 147.
- 25) 鏡ものの歴史については以下の文献、特に Grabes のものに拠った。Herbert Grabes: Speculum, Mirror und Looking-Glass. Kontinuität und Originalität der Spiegelmetapher in den Buchtiteln des Mittelalters und der englischen Literatur des 13. bis 17. Jahrhunderts. Tübingen 1973; Georg Felix Hartlaub: Zauber des Spiegels. Geschichte und Bedeutung des Spiegels in der Kunst. München 1951; Erik Peez: Die Macht der Spiegel. Der Spiegelmotiv in Literatur und Ästhetik des Zeitalters von Klassik und Romantik. Frankfurt am Main/Bern/New York/Paris 1990.; “Spiegel” in: Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm. Bd. 10/1. Leipzig 1905.
- 26) Grabes: a.a.O., S. 38 ff.
- 27) 特に著名なのは、カール2世(禿頭王)以後、西フランク国王のよき助言者であったランスのヒンクマル(Hinkmar von Reims)の手によるもの(“De regis persona et regio ministerio” 873)、あるいはヴィーラント(Christoph Martin Wieland 1733-1813)の『黄金の鏡』(“Der Goldne Spiegel” 1772)など。
- 28) “Mirror of Merchants” など。

- 29) Werner Hahl: Jeremias Gotthelf, der "Dichter des Hauses": Die christliche Familie als literarisches Modell der Gesellschaft. Stuttgart 1993, S.71.
- 30) たとえば、Caspar Huberinus: Spiegel der Hauszucht. Nürnberg 1565.
- 31) 『オイレンシュピーゲル(Eurenspiegel)』もこの系譜につながり、他にはアブラハム・ア・ザンクタ・クララ (Abraham a Sankta Clara 1644-1709) の『愚者の鏡 ("Judas der Ertzschelm, Der Narrenspiegel" 1686)』などが有名である。
- 32) Karl Fehr: Jeremias Gotthelf (Albert Bitzium). Stuttgart 1967, S. 43.
- 33) Carl Manuel: Albert Bitzium (Jeremias Gotthelf). Sein Leben und seine Schriften. Berlin 1857, S. 49. 他。
- 34) Hanns Peter Holl: Wie ich als Deutscher zu Jeremias Gotthelf kam. Erlench bei Zürich 1979, S.10 f.
- 35) Braungart: a.a.O., S. 225.